

#03_私が気持ちよくしてもらう必要なんて…ないのに

「ん〜…」

「は〜…」

「ん〜…」

「…ん。コホン…」

「ねえ、あのさ…あんた、本当に私を部屋に置いて、そのままにしておくつもり？」

「いや、あんた言ったじゃん。私に愛を教えてくれるってさ」

「言ったし。覚えてるし」

「はあ〜…あんだけ言ったくせに…いや、別にいいんだけどさ」

「別に住まわせてもらってるからって、愛とか感じないからね」

「そういう狙いがあったんだったら、残念でした」

「…意気地がないっていうか…臆病だよね。あんた」

「何したって良いって言ってんだから…ちょっとくらい手、出せばいいじゃん」

「別に、変な事されたいってわけじゃないけどさ」

「数日住まわせてもらってるし、何されたって文句は言わないよ」

「ん…私に言われて、やっとやる気になったの？」

「はあ…ま、いいよ。好きに使いな」

「ほら…んっ…？」

「あっ…んっ！ ちゅっ！ ちゅうう…！」

「んっ…ちょ、待って…ちゅっ！ ちゅう…ちゅっ…！」

「はあ、はあ…はあ…はあ…何するかと思えば…キス？」

「別に何したって良いって言ったのに…」

「ん、いいよ。別にあんたがしたい事すれば…そういう約束だし」

「ちょっと、びっくりしただけだし」

「ほら、すればいいじゃん」

「んっ…！ ちゅっ、ちゅう！ んちゅっ！ ふっ…ちゅう…んふっ、んっ！ ちゅっ！ ちゅう！」

「はあ、はあ…んんっ！ ちゅっ！ ちゅっ！ ちゅう！ んちゅう…んっ…ふう…ちゅっ！」

「んっ！ 待つてっ！ チュッ！ ちよつと…んちゅう、苦しい…っ！ ちゅううう…」

「ぷはあっ！ はあ、はあ…はあ、ふう…」

「んっ…ごめ、ちよつと…息、できなくなって…」

「んっ…別に、あんたが気にする事じゃないし…それよりも…」

「はあ、はあ…ふう…続き、しないの？」

「あんたの愛ってのは、これでおしまい？」

「んっ！ ほら、来なよ」

「んっ…はあ、んっ！ ちゅっ！ ちゅう！ んちゅっ、ちゅう…ちゅぷ、んちゅう…」

「ちゅう、ちゅう、ちゅっ…んちゅう、はあ、ふう♡ んちゅ、ちゅっ…んちゅう、ちゅう…」

「はあ、はあ♡ んっ、ちゅう、ちゅうう…はあ、ふう…ちゅっ、ちゅぷ…んちゅう…」

「んうちゅっ♡ ちゅぷっ♡ はあ、はあ、んっ！ んちゅう、んっ！ れろ、れるっ」

「れろちゅう、んんっ！ んちゅ、れる…はあ、んっ！ ちゅうっ、ちゅう…ちゅうううっ…」

「はあ、はあ、ふう、ふう…ごめん…息継ぎしようとしたら、舌…当たっちゃって…」

「なんか、その…エッチだし…思わず、口…離しちゃった…はあ、ふう…」

「は、私からしたくてしたわけじゃないっていうか、そういう事だから」

「べ、別に…あんたがやりたいっていうのなら、やっても良いけど…」

「ほら、何したって良いって言ってるんだからさ…」

「んっ！ してみなよ」

「んっ…んちゅっ！ ちゅう！ んちゅっ、ちゅう…はあ、はあ…♡」

「んっ…！ んちゅう、れる…れろっ…んふう♡ れろ、ぷちゅう…！」

「んんっ、れる、れる、れるれるれろむちゅ…んちゅう、んっ、はあ♡」

「れるれる、れろ、れる…むちゅっ、れる、れろ…れるううう…んっ…ぷはあ♡」

「はあ、はあ、はあ…んっ♡ 何…これ…」

「ん、別になんでもない…」

「こんな風に、キスされるの…初めてだったから、驚いてるだけ」

「は…っ、感じてるわけないし」

「愛とかどうとか、そういうのも全然伝わってない！」

「そんな事よりも、もっと私の身体を使ってやりたい事とかあるんじゃないの？ 焦れったいっ！」

「キスだけじゃなくてさ、もっとこう…あるでしょ？」

「何考えてるかわかんないけど、んっ…」

「こうやって胸揉んだりとか、セックスしたりとか、そういうの…するものでしょ！」

「んっ、あっ！ ふう、ふう、そうそう…やればできるじゃん」

「男なんて、皆自分の事しか考えてないんだから…」

「そうやって、欲望のままにさ、好きなようにすれば…」

「んっ…！ んっ！ んちゅっ、ちゅう、ちゅぶ、んんっ…」

「んっ、まだ、話してる途中なの…んちゅう、れるれる…にい♡」

「はあ、ふう♡ んちゅう、れるれる、れろむちゅっ、んふっ♡ んんっ♡」

「んちゅう…♡ れるれる、れろちゅう♡ んっ♡ れるれる、れろむちゅう♡」

「んふう♡ はあ、ふう♡ んるれるう、れるれう…れろれろれろ…」

「れるう♡ れろお、れろう…はあ、ふう♡ れるれる、れろむちゅう♡」

「はあ、はあ…はあ、はあ♡ んっ…人が喋ってる時にい…はあ、はあ…」

「別に、何しようが勝手だけど…さあ…」

「あんたの狙いが、本当…わかんないんだけど…」

「胸揉みながらさ、キスしかしない気？」

「…ムカつく」

「んちゅう、れるれる、れろぷちゅっ…んちゅう、れるれう…」
「れるう♡ んふ、れるれる、れろれろれるっ…♡ んふう、ふう♡」
「んっ♡ れる、れるれる、れろちゅう♡ はふう♡ れるれるれるれるっ…」
「んう、んっ♡ れるれろ、れるっ…んっ♡ んんっ♡ れろむちゅっ♡」

「んんっ♡ んっ！ あふあ、ま、待って…んちゅっ、ちゅう…」
「なんか、変な感じになったっていうか…んちゅう、れるれる、れろちゅう♡」
「なんか…来そう…♡ んちゅう、だから♡ 一回、んちゅう、止めて…♡」

「んんっ！ んちゅっ♡ はあ、んんっ！ んちゅ、れるれる、れろちゅう♡」
「らめっ…らってえ、んんっ、れるれる、れるれろ、れるむちゅう♡」
「んう！ らめっ…んちゅ、ちゅぶっ、らめ…らめっ…ちゅぶっ、んちゅううう♡」
「んっ、んちゅう、んっ！ んんんんん～っ！」

「んん♡ んんうむ…♡ んちゅ、れるれる、れる、れろ、んふう♡ れるれるれる…」
「んっ…ぷふう…はあ♡ はあ♡ はあ♡ はあ♡」

「はあ、はあ…あんた、何したの…？」
「こんな…キスで、身体…嘘…はあ、ふう…」

「ん…それで、次は何をするつもり…？」
「するんでしょ…そろそろ…その…」

「…へ？」

「終わり…？ これで…？」
「…まあ、あんたが良いつて言うんならいいけどさ…」
「でも、これじゃあ…私が一方的に、その…気持ち良くしてもらっただけだし…」
「だから…少しだけサービスしてあげる」

「その、ベッドと一緒に寝てあげるから…」
「別に…寝るだけだし。手出したりしたら、許さないから」
「ん、それじゃあ…さっさと寝る準備、しよ」